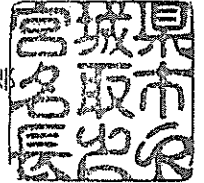


名教文ス発第 681 号
平成27年 3月25日

地方独立行政法人 宮城県立病院機構
理事長 菅村和夫 様

名取市長 佐々木 一十郎



平成26年度 埋蔵文化財調査業務完了報告書

平成26年10月 6日付けで締結された委託契約に伴う遺跡発掘調査事業について、委託契約書第10条の規定により、下記のとおり報告いたします。

記

1. 委託業務の名称

宮城県立精神医療センター施設建設関連発掘調査業務

2. 委託業務の実施期間

平成26年 10月6日 着手
平成27年 3月25日 完了

3. 委託業務の実施方法

直営事業

4. 委託金額とその精算額

委託金額	3,500,000円
精算額	3,221,913円

5. 添付書類

- (1) 実施報告書
- (2) 費用精算書
- (3) 請求書



H26 精神医療センター 野田山確認調査実績報告書

業務要項

- (1)業務の目的 宮城県立精神医療センター建替予定地内における埋蔵文化財の有無・分布・内容などの状況を把握し、今後の事業実施に伴う埋蔵文化財保護との調整を図るための基礎資料を得ることを目的とする。発見された資料・調査記録については、郷土歴史資料として保存・活用を図る。
- (2)業務名 宮城県立精神医療センター施設建設関連発掘調査業務
- (3)受託先 地方独立行政法人 宮城県立病院機構
- (4)業務期間 平成26年10月6日～平成27年3月25日
平成26年10月9日～平成26年12月3日
平成27年1月14日～平成27年2月5日（屋外調査）
平成26年10月14日～平成27年2月16日（室内整理作業）
- (5)事業場所 名取市愛島塩手字野田山地内他（屋外発掘調査）：野田山遺跡（番号12019）
名取市小山1丁目8-32 文化財資料整理室（室内整理作業）
- (6)調査面積 調査面積：3,720㎡
- (7)調査体制 宮城県教育委員会の指導を受け、名取市教育委員会が担当。
常時調査員 2名 補助調査員 1名 作業員 13名で実施した。
- (8)業務の内容

【屋外発掘調査】

今回の遺構確認調査は、事業計画地内における野田山遺跡の掘りや内容・量・時代などを把握することを目的に実施したもので、平成25年度に続き2年次目の遺構確認調査である。事業計画や調査の同意取得の関係もあり、平成26年度は、昨年度の調査区の北側の平坦面から北側の尾根・斜面部と、県立がんセンター緩和ケア病棟の北西側付近を対象（約20,000㎡）として実施した。具体的には、調査対象区域内に6m×20mの調査区トレンチ（TR）を地形の状況に合わせて29箇所設定し、バックホーによる表土除去作業の後、人力による遺構や基本土層の確認作業や、写真撮影・平面図および断面図作成を実施した。また、各調査区の位置等については、現地に測量基準点を設定し、公共座標系への位置付けを行った。

また、出土遺物については、トレンチ毎の基本層序や遺構堆積土毎に取り上げを行い、特に遺物が集中している等必要に応じて出土地点の記録作業や・出土状況の写真撮影等の実施後に取り上げた。

記録写真についてはトレンチ毎に、デジタルカメラ（一眼レフ 500万画素以上）を用いた撮影を実施した。撮影は、調査区全景、遺構検出状況、基本層序、遺構堆積土断面状況、遺物出土状況等を必要に応じて行った。

遺構調査・全体記録終了後、に補足調査等を実施し、調査記録全体の再確認を行い現地における調査作業を終了した。

【室内基礎整理作業】

屋外調査で作成された、図面類や記録写真の基礎的な整理作業を随時行った。調査で作成された図面類については、台帳の作成や、内容の照合などを行った。また、撮影された記録写真については、随時、記録媒体への取り込みを行い、遺構略図などをもとに各写真データへのタイトルのネーミングを行った。また、出土した遺物については、破損しないよう慎重かつ丁寧に洗浄し、乾燥後に出土地点の注記作業を行い、台帳の作成を行い、収納ボックスに収納した。

(9) 業務の結果

調査結果の詳細については、別紙 調査報告書による。

(10) 今後の事業計画と業務。

今回実施した遺構確認調査の結果により、事業実施前に、記録保存のための本格的な発掘調査が必要となる区域もあることから、別途、今後の進め方などについて協議する必要がある。

平成26年度 業務実施工程表

種別	細目	年月												備考				
		H26 4	5	6	7	8	9	10	11	12	H27 1	2	3					
屋外発掘調査作業	調査準備																	事務手続き 用具等準備・点検
	調査区域整備																	調査区域設定 表土掘削
	遺構平面プラン 検出作業																	
	遺構配置図作成																	1/100~1/200
	遺構精査作業																	遺構掘り込み 遺構台帳作成
	出土品取上げ																	遺物台帳作成
	遺構実測図作成																	必要な場合。T.S 測量等
	記録写真撮影																	
	補足調査																	調査内容の検討
	室内整理作業	遺物水洗・注記																
遺物接合・復元																		
調査諸記録の整理																		調査資料全体の基 礎整理
検出遺構・出土 遺物の検討																		
業務完了報告書作成																		

平成 26 年度

精神医療センター建替関連発掘調査報告書

名取市教育委員会 文化・スポーツ課 文化財係

調査要項

1. 事業名：精神医療センター建替関連発掘調査業務
2. 対象遺跡名：野田山遺跡
3. 遺跡所在地：名取市愛島塩手字野田山
4. 事業場所：名取市愛島塩手字野田山地内
5. 事業面積：43,500 m²
6. 確認調査面積：3307.3 m²
7. 調査地点：別紙参照、第1図、第2図
8. 調査期間

現地調査：平成26年10月9日～平成26年12月3日、平成27年1月14日～2月5日

整理事業：平成26年10月14日～平成27年2月16日

9. 調査機関：名取市教育委員会 文化・スポーツ課文化財係
10. 調査指導：宮城県教育庁 文化財保護課

I. 調査に至る経緯

平成25年6月1日付けで、地方独立行政法人宮城県立病院機構 理事長 菅村和夫から宮城県立精神医療センター建替計画に伴う埋蔵文化財の協議書が名取市教育委員会経由で宮城県に提出された。これを受けて、宮城県より計画地を対象とする遺構確認調査が必要であるとの回答があり、その後、平成25年7月24日付けで同申請者より発掘届の提出が行われた。

平成25年度は、調査対象区域の丘陵上部平坦面において、737 m²（対象面積の1.7%）の遺構確認調査を実施した。その結果、平安時代（9世紀）の竪穴住居跡の一部や溝跡等が見つかったが、この区域は、過去の土地利用などにより、遺構なども削平されている状況が明らかとなった。

その後、事業者と宮城県教委・名取市教委の3者で協議を重ね、平成26年度は、事業対象区域の北側の尾根上と、緩和ケア病棟の西側区域の一部について遺構確認調査を実施する事となった。

平成26年度は、平成26年10月6日に委託契約を締結し、各種条件整備が整った10月9日に遺構確認調査に着手した。なお、調査の進行については、平成26年中に北側尾根部分を、その後、条件が整った段階で、緩和ケア病棟の西側区域の調査に着手する事となった。

II. 遺跡の概要と調査区（図1・2）

今回調査を実施した野田山遺跡は、JR名取駅から西に約2kmの野田山丘陵に位置する縄文時代から古代までの集落跡である。遺跡が所在する野田山丘陵には、現在、宮城県立がんセンターや宮城県立名取高等看護学校、国立仙台高等専門学校名取キャンパスなどがあり、元々の丘陵地形は不明であるが、丘陵の東側に向かい緩やかな斜面地が続いていたものと思われる。野田山丘陵や周辺の丘陵上には多くの遺跡が確認されており、本遺跡の南に隣接する西野田遺跡では後期旧石器時代の石器が確認されている。また、南東側の丘陵には弥生時代の集落跡が広がる十三塚遺跡があり、出土した弥生土器は東北地方南部における弥生時代中期後葉の標識土器となっている。西方の丘陵上にある今熊野遺跡では、縄文時代前期と古墳時代の集落跡の他、発見当時では、東北で初見となる古墳時代の方形周溝墓が確認されており、周辺一帯は旧石器時代から活発な土地利用が行われた場所であるといえる。

なお、本遺跡に関する既存の調査は2例ある。1例目は平成3年に行われた宮城県立がんセンター建設に伴う発掘調査である。この調査では、古墳時代前期の竪穴住居13軒と奈良時代の住居跡3軒、平安時代の住居跡3軒が確認され、古墳時代と古代の集落跡が確認されている。2例目は平成12年に行われた県立がんセンター緩和ケア病棟建設に伴う発掘調査である。この調査では、後期旧石器時代の石器、古墳時代前期の竪穴住居7軒が確認され、古墳時代前期の集落跡が丘陵の南側斜面にも広がっていることが分かった。ここで出土した古墳時代前期の土器の中には、東北地方では稀な畿内の影響を強く受けた土器があり、畿内との関係性をうかがい知ることができる資料として貴重である。

今回の調査地は、野田山丘陵の西側区域一帯にあたり、丘陵上部の平坦部の北側から北側斜面地と、県立がんセンター緩和ケア病棟の北西側付近で、先述の調査地の西側にあたり、旧石器時代や古墳時代及び古代の遺跡が広がっている可能性が高いことが想定された。遺構・遺物の確認のための調査は、樹木伐採の後に、6m×20mを基本とする調査区を計29か所設定して行った。調査着手時点でまだ移設予定の樹木もあったため、一部調査区を変形させて調査を行った部分もある。

調査区設定については基準点測量打設とともに、世界測地系における位置座標の取得を行った。調査は重機（バックホー0.45 m³）で表土掘削を行った後、人力による掘削を経て、遺構・遺物の確認を行った。補足調査については、人力掘削により行った。写真記録はデジタル一眼レフカメラにより撮影を行い、平面図・断面図などの調査記録は、作業効率の観点から手実測により行った。

Ⅲ. 調査成果

1. 基本層序（図3）

今回の調査地は同じ丘陵の北斜面、平坦部、南緩斜面上部にあたり、地層の堆積環境が一様ではなかった。共通の層は確認できても、同一層序をしめすものではなかったため、北側斜面地と平坦部境に設けた14TR断ち割り断面（図3・写真A）と、南緩斜面地に設けた28TR断ち割り断面（図3・写真B）の二か所を用いて基本層序を示すこととする。

- 1層：暗褐～灰黄褐色粘質土。表土。
- 2層：にぶい黄橙～黒褐色粘質土。木の根などの影響を受けた包含層。
- 3層：暗褐色粘質土。
- 4層：明褐色粘質土～粘土。石器確認面。
- 5層：黄褐～橙色粘質土。細砂や小礫が少しまじる。
- 6層：明赤褐色スコリア。川崎一蔵王スコリアの可能性あり。南緩斜面地部分のみ。
- 7層：明黄褐色粘土。
- 8層：浅黄～灰白色パミス。安達愛島パミス層の可能性あり。
- 9層：にぶい褐色粘質土。粘性強い。
- 10層：にぶい褐色粘質土。やや赤みが強く、粘性も強い。
- 11層：にぶい橙色粘土。わずかに細砂が混じる。
- 12層：橙色粘土。
- 13層：にぶい橙粘土。
- 14層：にぶい黄色粘土。わずかに細砂が混じる。
- 15層：橙色粘土。

16層：橙色粘土に灰白色粘土ブロック混じる。

17層：にぶい橙色粘土。

18層：にぶい黄橙色粘土。鉄分沈着の痕あり。

19層：浅黒色礫。岩盤層に近い。

遺構検出は、3層もしくは4層上面で行った。特に平坦部では、表土である1層直下で4層の明褐色粘質土に至り、4層上面で遺構を検出することができた。

2. 各調査区の概要（図4～7）

今回の調査で、遺構が確認できた調査区は、1・4・6・8・9・10・11・13・20・22・23・24・25・29TRである。このうち、1・4・6・8・9・10・11・13・24・25・29TRは平坦部及び平坦部から北にのびる尾根上、20・22・23TRは北斜面地部分にあたる。（図4）

北斜面地に沿って設定した20・22・23TRでは、時期不明の溝や焼土と炭化物を含む土坑を検出した。いずれの遺構も深度が浅く、上部は大きく削平されていると想定できる。これらの調査区では目立った遺構は少ないが、尾根付近の遺構確認面や上部層中に黒曜石などの石器類が多く含まれており、25TR付近を中心に発見されている弥生時代の遺構との係わりが想定される。

平坦部および尾根上に設定した1・4・6・8・9・10・11・13・24・25・29TRでは、弥生時代の溝1条と竪穴住居の可能性が高い落ち込み1基、古墳時代の竪穴住居8棟、古代から中世の掘立柱建物2棟と掘立柱列1列、中世から近世の溝18条のほか、時期の特定できない土坑、溝、柱穴、ピットなど多数の遺構を確認した。

以下にその概要を報告する。

【1TR】（図4）

平坦部南西隅の調査区である。溝1条、ピット2基を確認した。遺構は確認できたものの、遺構密度は低い。

①基本層

1層（表土）：層厚20～40cmほどの10YR3/3暗褐色粘質土で、腐葉土である。

下部は10YR5/2灰黄褐色粘質土で、竹や木の根が入り込み、攪拌を受ける。

4層：遺構検出面。GL-25～40cm。標高：西34.12m～東35.0m。10YR7/8黄橙色粘質土である。粘性強い。検出時に石器等は確認していない。

以下、5層、8層と続く。

②検出した遺構・遺物

SD1：北東隅で検出した溝である。重複する遺構はない。遺構の大半が調査区外のため、規模や方向などは不明である。埋土は10YR4/2灰黄褐色粘質土で、非常にしまる。少量の土器細片と少量の炭化物を含む。詳細な時期は不明である。

P1：調査区西側で検出したピットである。埋土は10YR5/1褐灰色粘質土。遺物はない。P2とは組まない。

P2：調査区西側で検出したピットである。埋土は10YR5/1褐灰色粘質土。遺物は土師質土器細片が出土。

【4TR】（図5）

平坦部中央の調査区である。竪穴住居 1 棟、土坑 1 基、溝 3 条、掘立柱建物 1 棟、ピット多数を確認した。

①基本層

1 層（表土+旧耕作土）：層厚 30~40cm ほどの 10YR3/3 暗褐色粘質土層である。

4 層：遺構検出面。GL-35cm。標高：西 36.3m~東 36.2m。10YR5/6 黄褐色粘質土である。粘性ややあり。検出時に石器等は確認していない。

②検出した遺構・遺物

SI1：調査区東部で検出した竪穴住居である。遺構の南半は調査区外に広がるため全容は不明だが、一辺 4.5m ほどの方形プランと推定できる。方向は、北-45° - 東。埋土は 10YR4/2 灰黄褐色粘質シルトで、しまりが少しある。土器細片が散見される。北東辺中央部に焼土片が集中しており、カマドの存在がうかがえる。出土遺物や竪穴住居の特徴から、古墳時代前期と考えられる。

SK1：調査区中央南端で検出した土坑である。遺構の大半が調査区外に広がるため全容は不明である。埋土は 10YR4/3 にぶい黄褐色粘質シルトで、しまりが少しある。土器細片が散見される。

SD1：調査区東部で検出した東西方向の溝である。規模は、幅約 1.5m、検出長 10.5m 以上である。堆積土は 10YR5/2 灰黄褐色粘質シルトである。遺物はふくまれるものの細片で、時期は不明である。

SD2：調査区西部で検出した東西方向の溝である。規模は、幅約 1~1.5m、検出長 7m 以上である。東端部のカクランを掘り下げて断面を確認したところ、深さは 15cm 以上であることを確認した。堆積土は 10YR5/2 灰黄褐色粘質シルトと、SD1 と同様である。遺物はふくまれるものの細片で、時期は不明である。

SD3：調査区西部で検出した南北方向の溝である。規模は、幅約 0.8~1.7m、検出長 4m 以上である。堆積土は 10YR4/1 褐灰色粘質シルトである。SD1 や SD2 とは堆積土が異なる。

SB1：調査区中央南側で確認した 3 間以上×1 間以上の掘立柱建物である。埋土は 10YR4/3 にぶい黄褐色粘質シルトである。柱痕は確認できなかった。しまり少しあり。土器細片が散見される。

PIT 群：直径 30~40 cm ほどの円形プランのものが大半である。埋土は 10YR4/3 にぶい黄褐色粘質シルトである。柱痕名は確認できなかった。ややしまりなし。

遺構の重複関係や埋土の様子から、SI1・SD3 → SB1 (PIT 群) → SD1・SD2 の 3 時期の変遷が想定できる。

[6TR] (図 5)

平坦部北東部から北東側斜面に設定した南北方向の調査区である。南側と北側では標高差が 3m 以上あり、堆積土も北側谷部には遺物を含む流入土 (2 層) が厚く堆積していた。掘立柱建物 1 棟を確認した。

①基本層

1 層（表土）：層厚 20~50cm ほどの 10YR3/3 暗褐色粘質土である。

2 層（包含層）：10YR5/6 黄褐色粘質土である。遺物が含まれる。

4 層：遺構検出面。GL-20 cm。標高：北 29.8m~南 33.3m。10YR4/3 にぶい黄褐色粘質土である。ややしまりなし。検出時に石器等は確認していない。

②検出した遺構・遺物

SB3：調査区南端で検出した北西-南東方向の 2 間以上の柵列である。平坦部の縁に位置している。柱間

は 1.8m で、掘立柱建物跡の可能性もある。埋土は 10YR4/2 灰黄褐色粘質土である。

SX1：調査区北半部で検出した落ち込みである。規模は南北 6.6m 以上、東西 4.5m 以上である。堆積土は 10YR4/6 灰黄褐色粘質土である。断ち割って断面を確認した結果、堆積土下に 4 層を確認した。堆積状況から遺構ではなく、自然堆積土であると判断した。

その他小規模なピットが数基検出しているが、建物になりそうなものはない。

【8TR】(図 5)

平坦部中央やや北側の調査区である。竪穴住居 2 棟、溝 1 条、掘立柱建物 2 棟を確認した。

①基本層

1 層 (表土)：層厚 30~70cm ほどの 10YR4/2 灰黄褐色粘質土層である。

4 層：遺構検出面。GL-30~70cm。標高：西 35.9~東 34.6m、北 34.7~南 35.7m。7.5YR7/6 橙色粘質土である。粘性は強い。検出時に石器等は確認していない。

②検出した遺構・遺物

SI1：調査区東南部で検出した竪穴住居である。遺構の南半が調査区外に広がるため全容は明らかでないが、規模は北辺が 3.7m、西辺が 3m 以上である。方向は、北-45° - 東。埋土は 10YR4/6 灰黄褐色粘質土である。西辺中央部には土師器甕が確認でき、一個体分以上が埋まっていると考えられる。出土遺物や竪穴住居の特徴から、古墳時代前期と考えられる。

SI2：調査区中央で検出した、検出プランが不明瞭な竪穴式住居跡と考えられる遺構である。SI1・SA1 と重複し、古い時期のものと判断できる。遺構の南半が調査区外に広がるため全容は不明だが、規模は東辺が 6m 以上、西辺が 5m 以上である。埋土は 10YR4/6 灰黄褐色粘質土である。遺物は少なく、プランは不明瞭であるが、主軸の方向は、北-45° - 東に概ねそろっていると考えられる。方位や埋土の様相が近いことから、重複関係はあるものの、大きな時期差は考えにくく、SI1 に近い古墳時代前期と考えられる。

SD1：調査区西部で検出した、北西-南東方向の溝跡である。重複する遺構はない。規模は、幅 50~90cm、長さ 6m 以上である。

SB1：調査区北部で検出した掘立柱建物である。北西-南東方向の 4 間以上の柵列である。柱の柱間は 1.8m で、掘立柱建物跡の可能性もある。いずれも北壁沿いで確認したため南半しか検出されていないが、平面形はいずれも隅丸方形と推定される。柱痕跡は確認できなかった。埋土は 10YR5/2 灰褐色粘質土である。柱間 1.5~2.0m ほどの 4 間以上の掘立柱建物跡もしくは柱列 SA1 と考えられる。

SA1：調査区中央部で検出した東西方向の 3 間以上の柵列である。柱間 1.0~1.5m ほどである。SI2 の北西隅と重複し、それよりも新しい。平面形はいずれもほぼ円形である。遺物は出土しなかったが、埋土の様子や重複関係などから、時期は中世以降であると思われる。

【9TR】(図 5・図 6)

平坦部北西側に位置する調査区である。溝 1 条を確認した。

①基本層

1 層 (表土)：層厚 10~40cm ほどの 10YR4/2 灰黄褐色粘質土層である。

2 層 (包含層)：遺物包含層で、層厚 4cm ほどの 7.5YR6/2 灰褐色粘質土層である。II 層の土のブロックが

混入する。調査区北西部にのみごく薄く堆積する。

4層：遺構検出面である。GL-10～40cm。標高：35.2m。7.5YR6/6 橙色粘質土層である。

②検出した遺構・遺物

SD1：調査区中央部で検出した南北方向の溝である。規模は幅0.9～2.0m、長さ6.0m以上である。埋土は10YR5/2 灰黄褐色粘質土である。北壁際で断ち割ったところ深さは5cmほどである。遺構の断面形状はしっかりしているものの、木の根によるカクランが著しい。遺構だったところに根が入り込んだ遺構の名残であると考えられる。遺物は出土していない。

【10TR】(図5)

6TRと同様に、平坦部北東部から北東側斜面に設定した南北方向の調査区である。南側と北側では標高差が5m以上ある。途中、幅1～2mの犬走り状の平坦部が存在し、犬走りより北側の谷部には遺物を含む流入土(2層)が厚く堆積していた。竪穴住居1棟、ピット1基を確認した。

①基本層

1層(表土)：層厚30～60cmほどの10YR6/4にぶい黄橙色粘質土層である。

2層(流土1)：層厚10～80cmほどの10YR3/2 黒褐色粘質土層である。腐葉土。

(流土2)：層厚10～45cmほどの10YR5/1 褐灰色粘質土層である。小石を少し含む。

4層：遺構検出面である。GL-0.5～1.40m。標高：北28.75m～南33.5m。10YR5/6 黄褐色粘質土層である。検出時に石器等は確認していない。

②検出した遺構・遺物

S11：調査区南東角で検出した竪穴住居である。遺構の大部分が調査区外に広がるため規模は不明であるが、一辺3m以上であると推測できる。主軸は北を向く。埋土はややしまりのない10YR3/2 黒褐色粘質土で、4層ブロックを若干含む。遺物は土師質土器細片が出土しているが、時期は不明である。

P1：調査区南端で検出した柱穴である。平面形は一辺80cmほどの隅丸方形である。埋土は10YR4/2 灰黄褐色粘質土。遺物は出土せず、時期は不明である。

S11の主軸は北を向いており、他の竪穴住居の方位とは異なる。現状では出土遺物や遺構の重複関係から時期を判断することは難しい。

調査区内の検出標高は、高いところで33.5m、低いところで32.5mである。このことから、上面がすでに削平された状態であるのか、もともと北側傾斜地を利用して遺構が形成されたかのかは、現状では明らかではない。

【11TR】(図5・図6)

平坦部より北側に張り出す尾根上にあり、平坦部に一番近くに位置する調査区である。竪穴住居1棟、溝2条を確認した。

①基本層

1層(表土)：層厚25～45cmほどの10YR5/3にぶい黄褐色粘質土層である。

4層：遺構検出面である。GL-30～50cm。標高：南35.45m～北35.5m。7.5YR6/6 橙色粘質土層である。検出時に石器等は確認していない。

②検出した遺構・遺物

SI1：調査区南西角で検出した竪穴住居である。遺構の大部分が調査区外に広がるため、規模は不明である。方向は、北-60° - 東。埋土は 10YR5/2 灰黄褐色粘質土で、部分的に 4 層ブロックが混入する。土師質土器の細片が認められるが、詳細な時期は不明。

SD1：調査区中央部で検出した東西方向の溝である。規模は幅 0.8～1.6m、長さ 6.6m 以上である。埋土はややしまりのある 10YR5/2 灰黄褐色粘質土である。

SD2：調査区北部で検出した東西方向の溝である。規模は幅 70cm 前後、長さ 3.4m 以上である。埋土はしまりのない 10YR5/1 褐灰色粘質土である。

【13TR】(図 6)

平坦部より北側に張り出す尾根上にあり、11TR の北側に位置する調査区である。竪穴住居 1 棟、溝 1 条、ピット 1 基を確認した。

①基本層

1 層 (表土)：層厚 20～40cm ほどの 10YR5/3 にぶい黄褐色粘質土層である。

4 層：遺構検出面である。GL-20～40cm、標高：北 31.0～南 33.1m。7.5YR4/6 褐色粘質土層である。検出時に石器等は確認していない。

②検出した遺構・遺物

SI1：調査区西部で検出した竪穴住居である。遺構の大部分が調査区外に広がるため全容は明らかでないが、規模は東辺が 3.5m、南辺が 1.5m 以上である。方向は、北-15° - 東。埋土は 7.5YR5/2 灰褐色粘質土である。

SD1：調査区南側で検出した南北方向の溝である。規模は、幅 70～80cm、長さ 6m 以上である。

P1：調査区南西部で検出したピットである。遺構の半分が調査区外に広がるため、規模は不明である。埋土は 7.5YR 4/2 灰褐色粘質土である。

いずれの遺構からも遺物の細片は認められるものの時期を特定できるような資料はない。また、壁際の土層観察から遺構の深度は比較的浅いものと考えられることから、上面が削平を受けている可能性が考えられる。

【24TR】(図 7)

平坦部より北側に張り出す尾根上の北端に位置する調査区である。溝 3 条、ピット 6 基を確認した。

①基本層

1 層 (表土)：層厚 10cm 前後の 10YR4/4 褐色シルト層である。しまりほとんどなし。

2 層：層厚 20cm 前後の土壌化層である。

4 層：遺構検出面である。GL-20～40cm。標高：東 28.6m～西 28.68m。10YR5/6 黄褐色粘質シルト層である。しまり強い。検出面上で石器が 2 点出土している。

②検出した遺構・遺物

SD1・2・3：調査区中央南部で検出した溝である。規模は、SD1 は幅約 90cm、長さ 6.6m 以上ある。SD2 は幅 60cm、長さ 3.2m。SD3 は幅 70cm、長さ 1.3m 以上である。いずれも埋土は 10YR3/2 黒褐色シルトである。遺物はなく、時期は不明である。SD1・2・3 は同一の遺構の可能性はある。

P1：調査区北東部で検出したピットである。平面形は直径 30cm ほどの円形である。埋土は 10YR4/2 灰黄

褐色シルトである。遺物は出土せず、時期は不明である。

P2：調査区北東部で検出したピットである。平面形は直径 30 cm ほどの不整形である。埋土は 10YR4/2 灰黄褐色シルトである。遺物は出土せず、時期は不明である。

P3：調査区北東部で検出したピットである。平面形は直径 35 cm ほどの円形である。埋土は 7.5YR 4/3 褐色シルトである。遺物は出土せず、時期は不明である。

P4：調査区南西部で検出したピットである。平面形は長軸 60cm、短軸 50cm の隅丸方形である。埋土は、10YR 3/2 黒褐色シルトである。遺物は出土せず、時期は不明である。

P5：調査区北西部で検出したピットである。平面形は直径 20cm ほどの円形である。埋土は、10YR 3/3 暗褐色シルトで、焼土がわずかに混入する。遺物は出土せず、時期は不明である。

P6：調査区北西部で検出した。平面形は長軸 28cm、短軸 20cm ほどの楕円形のピットである。埋土はしまりの弱い 10YR4/3 にぶい黄褐色シルトで、4 層土（遺物包含層）が入り込んだカクランの可能性があり。遺物は、土器片が 2 点出土した。

【25TR】 (図 7)

平坦部より北側に張り出す尾根上に位置する調査区である。竪穴住居 2 棟 (+ 可能性のあるもの 1 棟)、溝 5 条、土坑 2 基を確認した。

①基本層

1 層 (表土)：層厚 5～10cm ほどの 10YR4/4 褐色シルト層である。

2 層：層厚 10cm 前後の土壤化層。10YR4/4 褐色シルトで、しまりはほとんどない。

4 層：遺構検出面である。GL-20～30cm、標高：西 29.95m～東 28.75m。7.5YR5/8 明褐色粘土 (ややシルト質) である。

②検出した遺構・遺物

S11-1：調査区中央南部で検出した竪穴住居である。S11-2 と重複し、それよりも新しい。遺構の南東部が調査区外に広がるため詳細は明らかでないが、北西辺は 1.7m 以上である。方向は、北-45° - 東。埋土は 10YR4/6 褐色粘質シルトで、地山ブロックが混入する。S11-2 と同遺構の可能性があり。

S11-2：調査区中央南部で検出した竪穴住居である。S11-1・SK1 と重複し、それらよりも古い。遺構の南東部が調査区外に広がるため詳細は明らかでないが、北西辺は 2.6m、北東辺 2m 以上である。方向は、北-45° - 東。埋土は 10YR3/3 暗褐色粘質シルトで、地山ブロックが混入する。S11-1 と同遺構の可能性があり。

SD1：調査区東部で検出した北西 - 南東方向の溝である。規模は長さ 5.7m 以上、幅 1.8～3.7m 以上である。埋土は地山ブロックが混入する 10YR3/2 黒褐色粘質シルトである。検出面上で弥生土器片や石器 (鏃) が出土している。

SD2：調査区中央北部で検出した南北方向の溝である。SD3・SX4 と重複し、SD3 より新しく、SX4 よりも古い。規模は、幅 0.6～0.9m、長さ 2.9m 以上である。埋土は 10YR3/3 暗褐色粘質シルトで、地山ブロックが混入する。

SD3：調査区中央北部で検出した北西 - 南東方向の溝である。SD2 と重複し、それよりも古い。遺構の大部分が検出されていないため、平面形や規模は不明である。埋土は 10YR4/3 にぶい黄褐色粘質シルトである。遺物は出土していない。

- SD4：調査区中央北部で検出した北西 - 南東方向の溝である。SK2 と重複し、それよりも古い。遺構の大部分が検出されていないため、平面形や規模は不明である。埋土は 10YR3/2 黒褐色粘質シルトである。
- SD5：調査区北西部で検出した、南北方向の蛇行する溝である。SX2 と重複し、それよりも古い。規模は幅 0.5～1.3m、長さ 3m 以上である。埋土は 10YR3/2 黒褐色粘質シルトである。
- SK1：調査区中央南部で検出した土坑である。SI1-2 と重複し、それよりも新しい。規模は長軸 1.4m、短軸 0.7m である。平面形は不整な楕円形で、埋土は 10YR3/3 暗褐色粘質シルトに地山ブロックが混入する。
- SK2：調査区中央北部で検出した土坑である。SD4 と重複し、それよりも新しい。規模は長軸 1.4m、短軸 0.9m である。平面形は不整な楕円形で、埋土は 10YR3/3 暗褐色粘質シルトに地山ブロックが混入する。
- SX1：調査区中央北東部で検出した遺構である。SX4 と重複し、それよりも新しい。規模は長軸 2m 以上、短軸 0.8～1.2m、深さは不明である。平面形は遺構の中央部分でくびれたような不整形を呈する。埋土は 10YR3/3 暗褐色粘質土で地山ブロックが混入する。遺構の南部では、焼土が 1.1×0.7m ほどの範囲で検出している。
- SX2：調査区西部で検出した遺構である。SD5・SX3 と重複し、SD5 よりも新しく、SX3 よりも古い。規模は長軸 2.7m、短軸 2.1m。隅丸方形の平面プランである。埋土は 10YR3/2 黒褐色粘質シルトである。
- SX3：調査区西部で検出した。SX2 と重複し、それよりも新しい。規模は長軸 1.9m、短軸 1.2m ほど、深さは不明である。平面形はいびつな楕円形を呈する。埋土は 10YR3/2 黒褐色粘質シルトである。
- SX4：調査区中央部から北側にかけて確認された不整形の遺構である。現在明確な遺構のプランは認められない。SD1・SD2・SX1 と重複し、SD2 よりも新しく、SD1・SX1 よりも古い。埋土は 10YR3/3 暗褐色粘質土で地山ブロックが混入する。SX1 と合わせ、竪穴住居の可能性が考えられる。

【29TR】(図 5)

平坦部中央の調査区である。竪穴住居 1 棟、溝 2 条、焼土遺構 1 基、ピット 3 基、土坑 1 基を確認した。

①基本層

- 1 層：現代の耕作土（大根畑）で、層厚 30cm 前後の 10YR3/2 黒褐色粘質土層である。
- 2 層：遺構検出面層厚 20cm ほどの 7.5YR4/4 褐色粘土層である。10YR3/2 黒褐色粘土・粘質土ブロックが斑状に混入するが、木の根と考えられる。黒色粒が若干混入する。本トレンチの遺構検出面である。
- 4 層：遺構検出面である。GL-30cm。標高：南 36.4m～北 36.4m。層厚 20cm 以上の 7.5YR5/6 明褐色粘土層である。黒褐色土ブロックがわずかに混入するが、根の影響と考えられる。礫（パミス？）や黒色粒が若干混入する。旧石器時代の層と推定されるが、石器は出土していない。

②検出した遺構・遺物

- SI1：調査区東部で検出した竪穴住居である。規模は南辺 4.3m、西辺 5.3m である。方向は、北-45° - 東。埋土は 10YR3/2 黒褐色粘質土で、地山粒や地山ブロックが混入する。中央やや南側で焼土のまとまりが認められる。また土師器細片も出土している。出土遺物や竪穴住居の特徴から、古墳時代前期と考えられる。

SD1：調査区南側で検出した東西方向の溝である。規模は幅 0.7m、長さ 13m 以上、深さ 10～15cm である。平面形は直線的で、断面形は北側には段があり、南側はゆるやかに立ち上がる。底面には少し凹凸がある。埋土は 10YR3/2 黒褐色粘質土で、地山ブロックが若干混入する。炭化物粒・焼土粒がわずかにみられる。遺物は出土していない。

SD2：調査区北側で検出した東西方向の溝である。規模は、幅 30～50cm、長さ 15m 以上、深さ 10cm である。埋土は 10YR3/2 黒褐色粘質土で、しまりはやや弱い。遺物は出土していない。

焼土遺構：調査区北西部で検出した。P2 と重複し、それよりも古い。一部分しか検出していないため、規模や平面形は不明である。埋土は平面上で 2 層に分けられる。1 層は 10YR3/3 暗褐色粘質土で、焼土粒が若干混入する。2 層は 5YR4/4 に近い赤褐色の焼土である。遺物は出土していない。

P1・P2・P3・SK1：いずれも調査区西部で検出した。埋土は 10YR3/3 暗褐色粘質土に 10YR3/1～2/1 黒色粘質土や地山ブロックが混入する。

3. まとめ

今回の調査では、事業計画範囲内に計 29 か所の調査区を設定し、遺構のプラン確認作業を中心とする部分的な調査を行った。その結果、丘陵上部北側の平坦部及び北にのびる尾根上に、古墳時代や弥生時代の遺構・遺物が遺存していることが確認された。

確認した遺構は、弥生時代から近世にかけてのものがあり、弥生時代の溝 1 条と竪穴住居の可能性が高い落ち込み 1 基、古墳時代の竪穴住居 8 棟、古代から中世の掘立柱建物 2 棟と掘立柱列 1 列、中世から近世の溝 18 条のほか、時期の特定できない土坑、溝、柱穴、ピットなどがある。

特に古墳時代の竪穴住居は、いずれも方形の平面プランで、主軸の傾きが北-45° - 東を示すものが多い。出土遺物から、古墳時代前半の時期を想定できるもので、いずれも平坦部で確認されたものである。この他にも、丘陵上部の平坦部から尾根上で傾きが異なる竪穴住居跡も見つかっているが、出土遺物が小片のため詳細な時期は不明である。以前、病院建設等に伴い同丘陵東側で行われた調査でも、主軸の傾きが異なる同時期（古墳時代前期）の竪穴住居が確認されたが、調査結果から、それらは時期差を示すものでなく、地形に合わせて作られた結果であると考えられており、今回の調査で確認された主軸の異なる竪穴住居も、古墳時代前半期のものである可能性も考えられる。

以上のように、当該地には古墳時代の集落が広がっていたことが明らかとなった。また尾根上北側では、弥生時代中期後半の様相を示す遺物が多く認められることから、平坦部では確認できなかった弥生時代の遺構が広がっている可能性もある。

IV. 調査成果

1. 今回の調査地は、野田山丘陵に位置する縄文時代から古代までの集落跡である野田山遺跡である。
2. 同丘陵東側で行われた過去の調査では、後期旧石器や弥生時代中期後半の遺物包含層の他、古墳時代前期と古代の集落跡が確認され、丘陵西側まで集落が広がる可能性が指摘されている。今回の調査では指摘どおり、丘陵西側及び北西側に遺構のひろがりを確認することができた。
3. 今回の調査では、丘陵上部北側の平坦部及び北側の尾根上を中心に、弥生時代から近世にわたる遺構が確認された。見つかったものには、弥生時代の溝 1 条と竪穴住居の可能性が高い落ち込み 1 基、古墳時代の竪穴住居 8 棟、古代から中世の掘立柱建物 2 棟と掘立柱列 1 列、中世から近世の溝 18 条の他、

時期の特定できない土坑、溝、柱穴、ピットなど、多数の遺構などがある。

4. 過去の調査で出土した古墳時代前期の土器の中には、東北地方で稀な畿内の影響を強く受けた土器もあるが、今回の調査では同様の土器は発見されなかった。しかし、今回の調査でも古墳時代前期の竪穴住居跡などが見ついていることから、今後の調査で、畿内との関係性を示す資料が発見される可能性もある。



4 TR 全景 (西から)



調査区南東側 (東から)



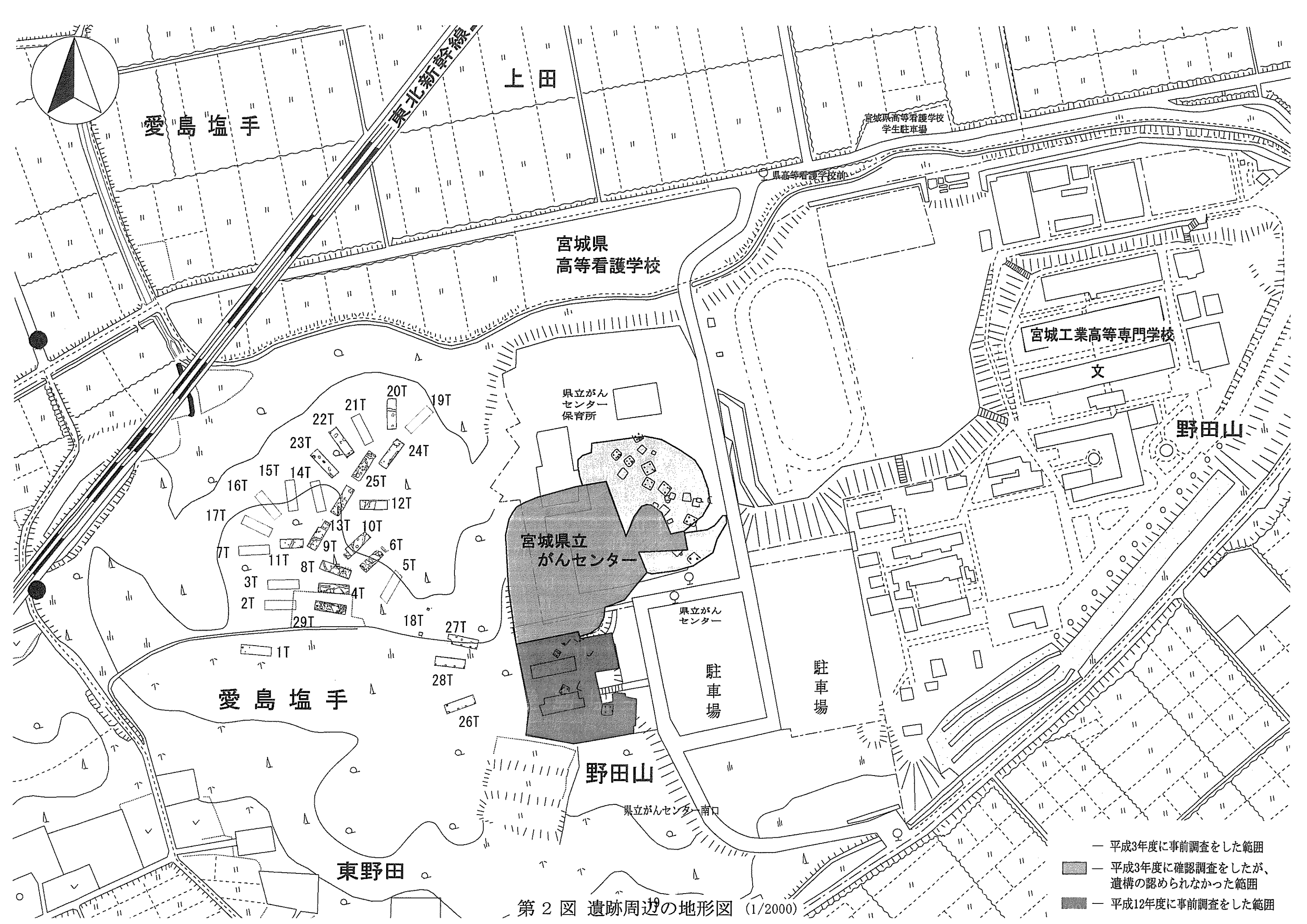
調査区東側 (北西から)



SI1 全景 (北から)



SD2 全景 (東から)



愛島塩手

東北新幹線

上田

宮城県
高等看護学校

宮城県高等看護学校
学生駐車場

県高等看護学校前

宮城工業高等専門学校

文

野田山

県立がん
センター
保育所

宮城県立
がんセンター

県立がん
センター

駐車場

駐車場

愛島塩手

野田山

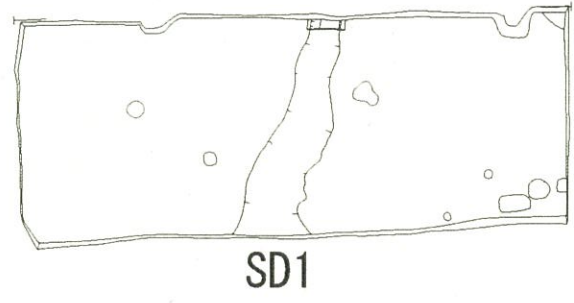
県立がんセンター南口

東野田

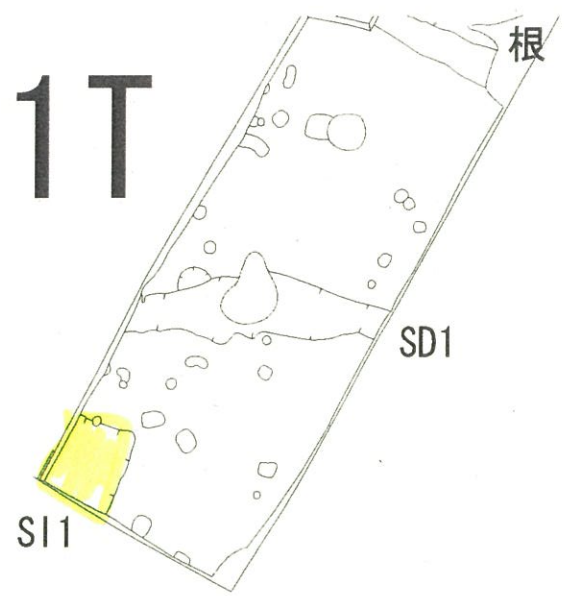
第2図 遺跡周辺の地形図 (1/2000)

- 平成3年度に事前調査をした範囲
- 平成3年度に確認調査をしたが、遺構の認められなかった範囲
- 平成12年度に事前調査をした範囲

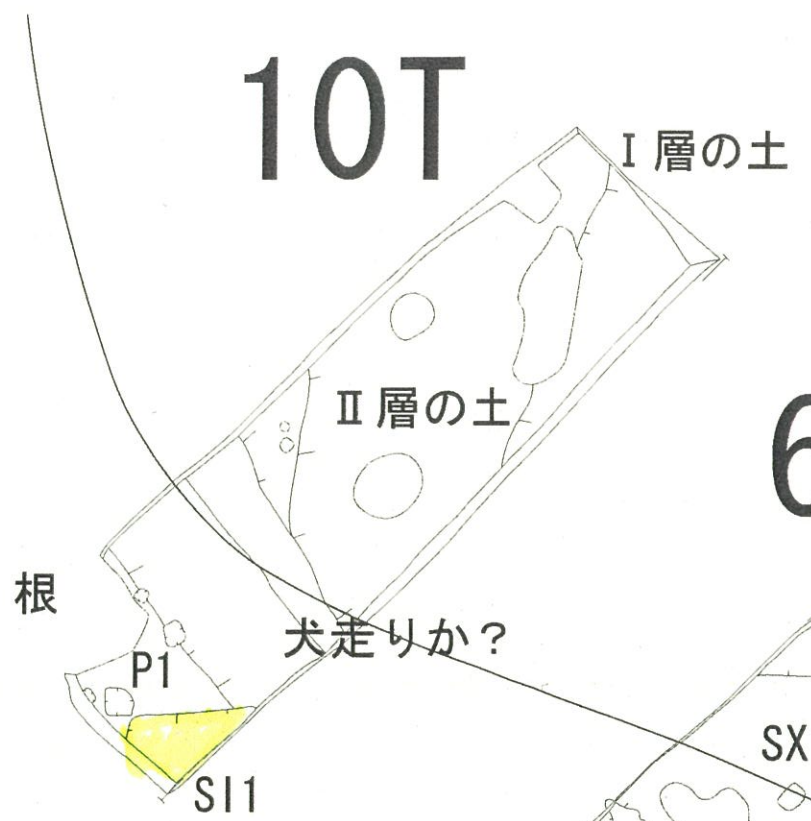
9T



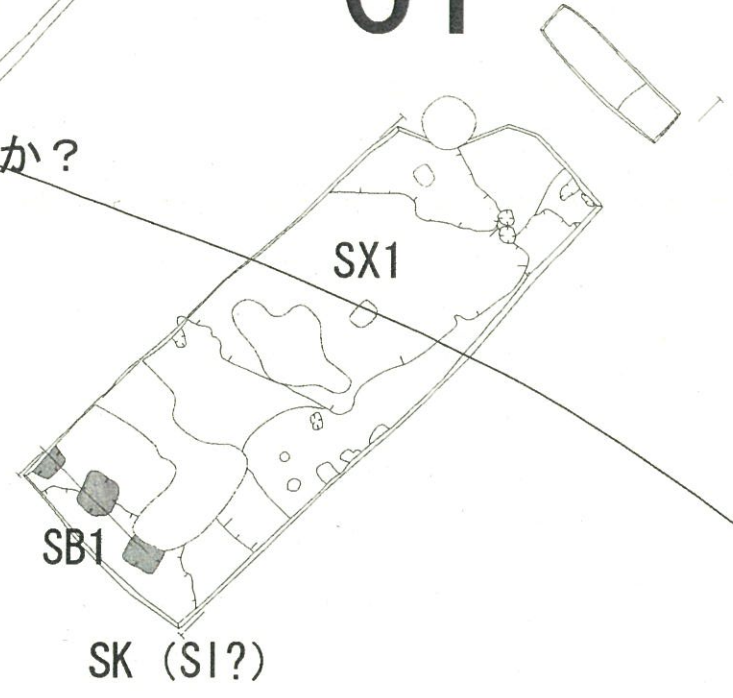
11T



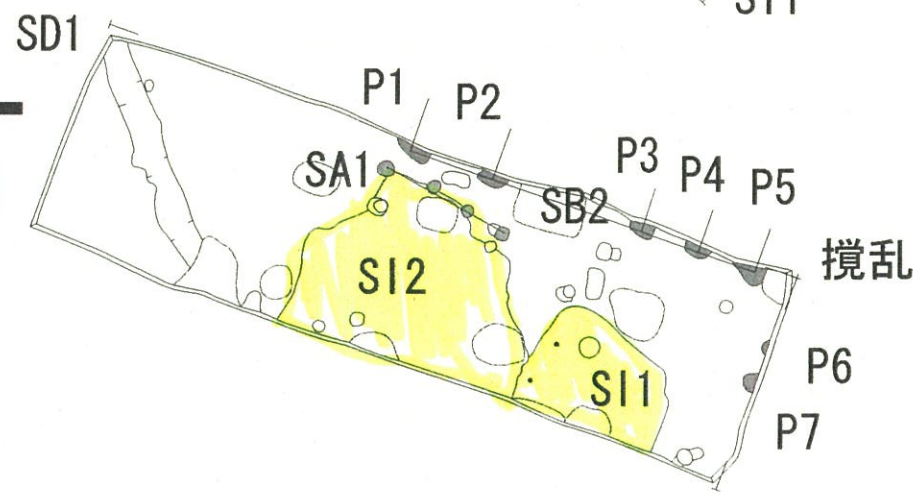
10T



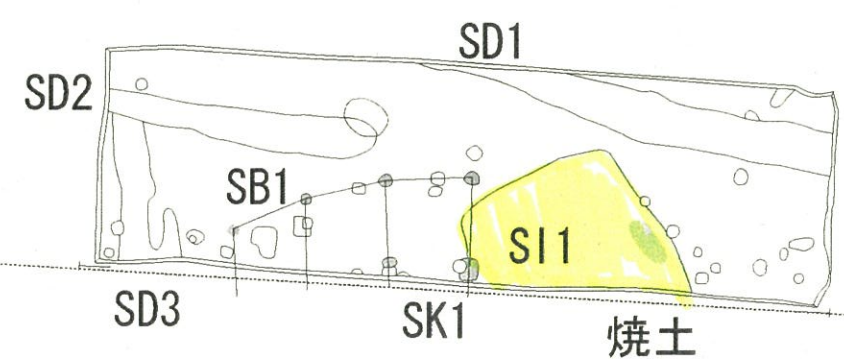
6T



8T

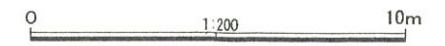
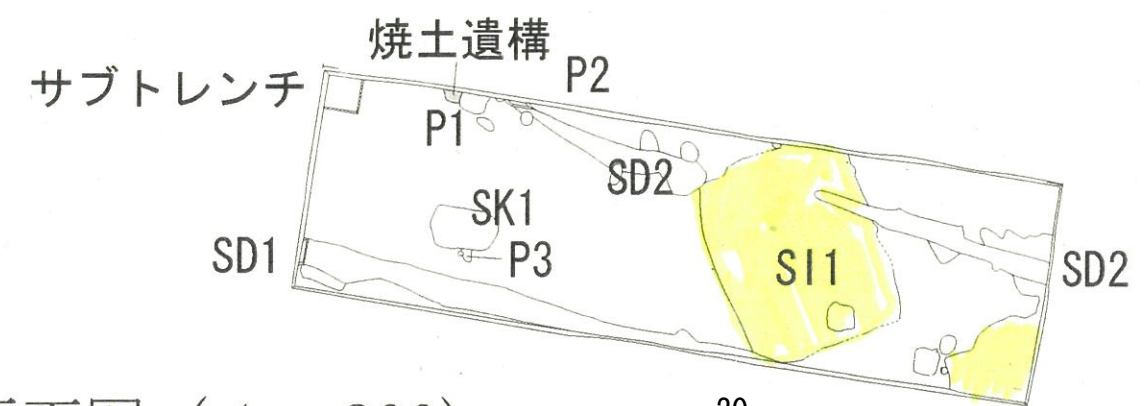


4T

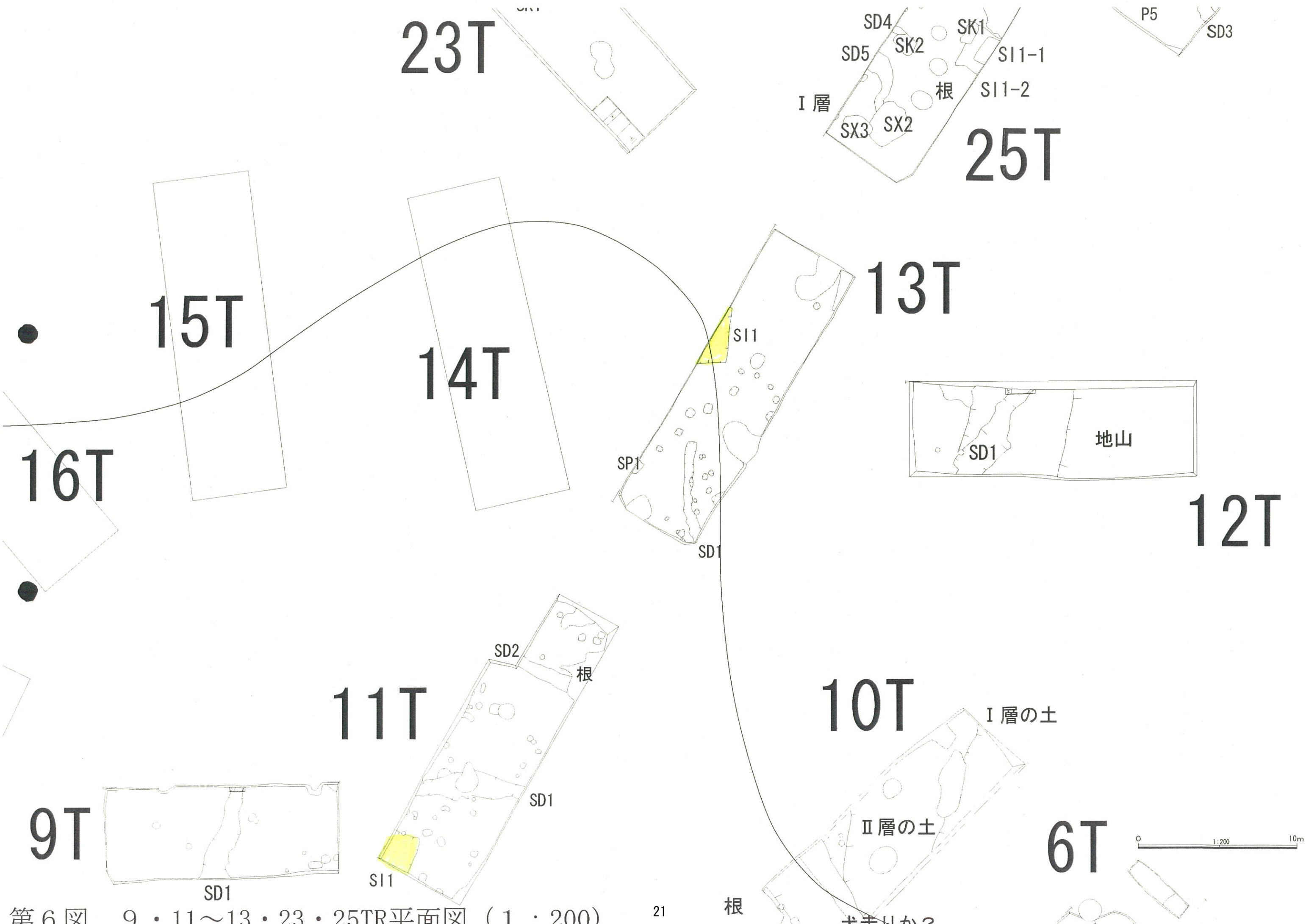


5T

29T



第5図 4・6・8～11TR平面図 (1:200)



第6図 9・11~13・23・25TR平面図 (1:200)

